

蓬 左

HÔSA



「出雲国風土記」表紙

展示室1・2 徳川美術館

臨時企画 春季特別展

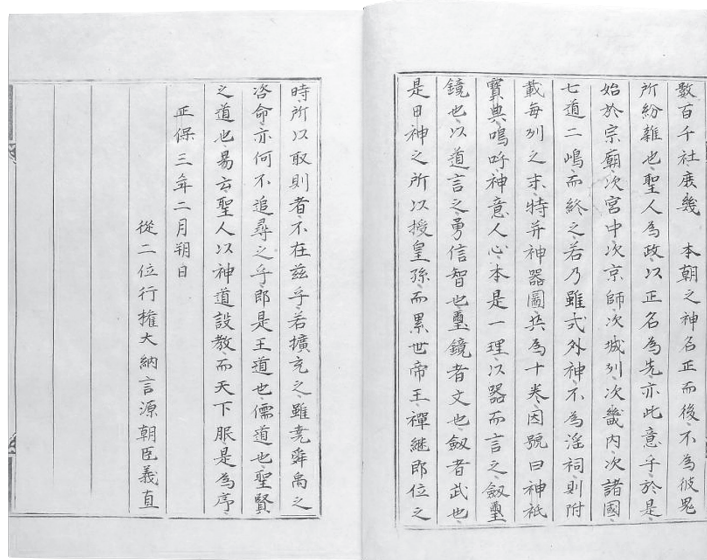
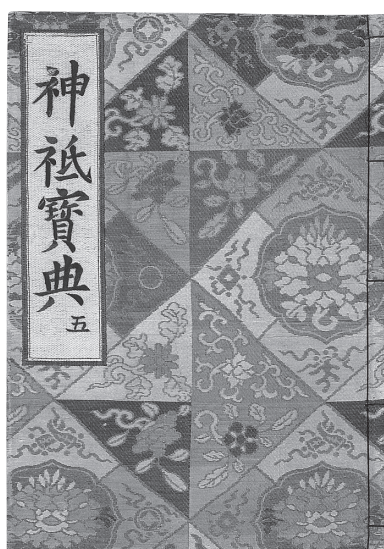
徳川将軍と尾張の殿さま

徳川家康の九男義直を祖とする尾張徳川家は、御三家筆頭として高い格式を誇り、徳川将軍家を支える最も親密な家として、尾張名古屋の地を治めました。この展覧会では、尾張徳川家と将軍家との関係を示す様々な拝領品や、尾張徳川家歴代十六人の個性が窺える自作・所用の品々を紹介します。第一会場となる蓬左文庫展示室では、尾張領有の歴史をたどり、初代義直と父の家康・兄の二代将軍秀忠との関係、義直自作の書画や所用の道具を展示します。また、名古屋市蓬左文庫に引き継がれている家康遺品の貴重な書籍（駿河御譲本）や、家康の影響を受けて義直自ら蒐集・編纂し、尾張徳川家御文庫の基となった蔵書も併せて展示します。第二会場の徳川美術館本館では、二代光友より十六代義宜に至る尾張徳川家歴代当主と、三代将軍家光以降の歴代将軍が遺した品々、刀剣などの拝領品を展示します。これらの作品を通して徳川将軍家と尾張徳川家の深いつながりを感じていただければと思います。

えびす
夷図

江戸時代初期 徳川美術館蔵

家康筆と伝わる夷図。右手に釣竿、左手に鯛を抱える姿が描かれる。けっして上手ではないが、愛嬌のある姿で描かれており、家康の人物が忍ばれる。



じんぎほうてん
神祇宝典 10冊 正保3年(1646)序

由緒ある神社について史書を基に義直が調べさせた記録。中国製とも言われる綿の表紙、刺繍による表題など、藩主の編纂書にふさわしい豪華な仕立てとなっている。

展示室1

建中寺と尾張徳川家ゆかりの寺院 ―法然上人八〇〇年大遠忌―

建中寺 本堂

建中寺は、江戸時代には五万坪ちかい敷地の広大な寺院で、天明年間(1764～72)の火災により多くが焼失。その後に再建された本堂は、今も市内最大の木造建築である。



江戸時代、尾張徳川家ゆかりの人々をとむらう寺院が名古屋の各所に造営されました。その代表である建中寺(東区)には、歴代の藩主と夫人が葬られました。戦後の都市計画により広大だった境内は縮少され墓地も改葬されて、当初の景観とは大きく変わりました。しかし、なお本堂は市内最大の木造建築で、多くの文化財を今に伝えており、県内における浄土宗の中核寺院です。

高岳院(東区)は、初代藩主義直の兄で、幼少期に亡くなった仙千代をとむらうための寺院です。同じく、若くして亡くなった兄松平忠吉をとむらう性高院(千種区)も市内では古い寺院です。初代藩主義直の生母をとむらう相応寺(千種区)は、昭和になって現在地に移転しましたが、創建当初の江戸時代初期の建築が現存しています。二代藩主光友は、建中寺のほかにも梅香院(中区)、大森寺(守山区)など多くの寺院を創建しました。この展覧会では、浄土宗の宗祖法然上人の八〇〇年大遠忌にあわせ、尾張徳川家によって建立された由緒深い浄土宗の寺院とそれらに伝えられた絵画、陶磁器、古文書などの文化財を紹介します。

展示室2

名古屋の天王まつり

疫病を鎮める牛頭天王ごずを祀る天王まつりは、夏に疫病がはやる都市を中心に全国各地で行われます。その代表が京都の祇園祭であり、この地域では、東日本の天王信仰の中心地である津島神社の天王まつりが、一六世紀半ばから行われてきました。

江戸時代の名古屋城下では、六月に入ると津島神社の御立符(御札)を祀って各町内で天王まつりが行われ、六月半ば、津島神社の宵祭のころには、亀尾天王社、堀川東岸の広井天王社、さらに熱田の南新宮社で盛大に行われました。

東区の筒井町や古出来・新出来の各町では、現在も六月のはじめの土日には各町内から山車が出て華やかに天王まつりが行われます。近年は、恒例の山車揃えが、東区建中寺の境内だけでなく徳川園でも行われ、蓬左文庫前の広場で、からくり人形を主役にした各町の山車が華麗なパフォーマンスをくり広げます。

今年の蓬左文庫の展示室は、江戸時代以来の名古屋の天王まつりを紹介します。



平成22年6月6日(日)に蓬左文庫前の広場で行われた「徳川園山車揃え」に参加した東区新出来の鹿子神車かしこじんしゃ(右)と同古出来の河水車かすいしゃ(左)である。

今年は6月5日(日)午前11時から正午に予定されている。

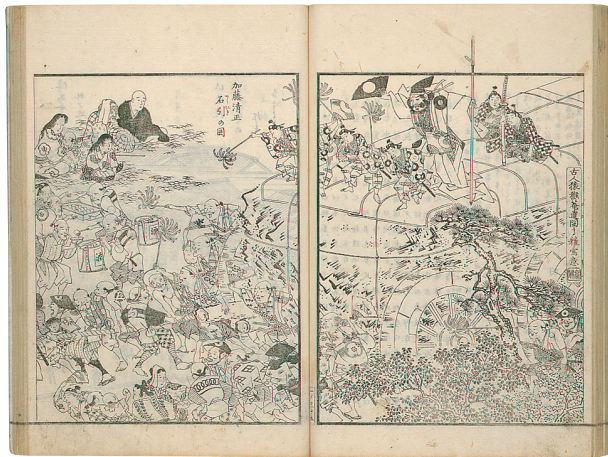
展示室1

歿後四〇〇年 加藤清正の時代

「賤ヶ岳の七本槍」や「虎狩」で知られる加藤清正は、尾張の出身(現名古屋市中村区)ということもあり、名古屋では特に人気のある戦国武将の一人です。清正を神として祀った「清正公」信仰も盛んです。

清正は、永禄五年(一五六二)に生まれ、豊臣秀吉(一五三七～九八)に仕えました。天正九年(一五八一)の中国攻めのころから頭角をあらわし、その後も賤ヶ岳の戦い、小牧・長久手の戦いや朝鮮出兵といった合戦に活躍しています。関ヶ原合戦時は、石田三成との確執から東軍(徳川方)に与しますが、秀吉の歿後も豊臣恩顧の大名として秀吉嫡男の秀頼に忠誠を尽くし続けました。慶長一六年(一六一一)三月、二条城において家康と秀頼との対面の仲介役を終えると、同年六月二四日、熊本で歿しました。

清正の生涯は、秀吉・家康の天下統一への道程と重なります。その時代は鉄砲の組織的な使用や重層の天守などに象徴される戦国時代の佳境でした。清正の足跡をたどりながら、彼の生きた時代を振り返ります。



『尾張名所図会 前編 卷之一』
「加藤清正石引の図」 天保15年(1844)

熊本城・江戸城・名古屋城等の築城に携わった清正は、それらの城の出来栄から築城の名手と評価されている。慶長15年(1610)に築造が始まった名古屋城は戦国城郭の集大成といえる城で、清正は、同年8月に天守の石垣普請を完成させた。

ながえぼしなりかぶと 加藤清正所用
桃山時代 徳川美術館蔵

清正を象徴する兜で、鉄の鉢に、張懸はりかけで後ろ上方に長く伸びた烏帽子を形作っている。法華信者であった清正自筆の経文を紙縿こよりにして張り懸けたと伝えられている。加藤家の家紋の蛇の目ではなく、日輪が表されている。



城造りあれこれ

現在、「城」といえば一般的に、白亜の天守および高い石垣・広く深い堀、といったイメージでとらえられています。いずれも世界遺産姫路城や全国各地に点在する模擬天守など、豊臣秀吉による天下統一、徳川家康による江戸開幕といった時期に造られた、いわゆる近世城郭の姿です。しかしこの「典型的な城」、近世城郭では、そのほとんどで実際には戦闘がおこなわれないまま、要塞としての役目を終えています。

天下統一前夜、大名間の争いは一国あるいは数カ国の支配権を賭けたレベルの大規模なもので、全面戦争によってでは勝っても負けても双方が膨大な損耗を強いられます。特に、人的損耗が激しくなる堅固で大規模な近世城郭相手の強攻策は、文字通り最終手段として忌避されました。秀吉が城を遠巻きに囲んだ水攻め・兵糧攻めを得意とし、直接の攻城戦を極力避けたのも、結果として相手が屈服しさえすればよい、という割り切りといえます。

この頃に至って長らく、攻め手の攻撃に対して反撃するという受身の施設であった城郭は、「築城することによって、その城への攻撃そのものをむしろ回避させる」という、興味深い終末期を迎えます。

近世城郭の、こうした一面についてご紹介します。



おおさかふゆの陣 だて の ず
大坂冬陣立之図 江戸時代

難攻不落の大坂城に対し、家康は幕府軍20万人で完全に包囲する作戦に出た。

城下町の「文教地区」

当文庫のレファレンスで「二」を争

うのは、尾張藩士の御先祖調べである。尾張藩士であったことが確実で、先祖の通名（○右衛門とか○兵衛）が分かっている。三割以上の確率でその人名が見つかると。その上で主な役職や禄高、菩提寺、役宅場所を記憶しているとほぼ特定できる。なかでも明治初期の戸籍には、最後の藩士であった人物の生年と親の名前、当時の住所が記載されているので各種城下絵図と対照できる。可能ならば是非とも祖父、曾祖父の除籍簿を入手されることをお勧めする。こうした調査をお手伝いするうちに、些細なことではあるがおもしろい発見をすることもある。

近世城下町名古屋の最大の特徴とされる「碁盤割」の街区は、商業地の隆盛を目途した町屋区画として計画されたが、その全域が町人地というわけではない。碁盤割南部の東西に、一部が武家地となっており、今回、その西側のブロック、本重町筋と堀切筋、長者町通と伏見町通に囲繞された区画（下図参照）の住人について紹介し

よう。地図は主に名古屋博物館発行の文政七年（一八二四）の復元マップを用いた。

このブロックでは「医学館」がよく知られている。当時の様子は『尾張名所図会』『名陽見聞図会』などに詳しい。その場所Wには浅井平之丞の名が記されている。この平之丞正封（貞庵）が私塾である「医学館」を開き、藩医の技能検定をおこなった人物である。浅井家は京都で著名な医者で、曾祖父の周廻（東軒）が尾張家六代継友に度々召し出され、祖父の惟寅（図南）が八代宗勝の招きに応じて名古屋に居を構えた。図南は墨竹画を得意とする南画家としても知られている。父の周碩（南溟）も藩医となるが図南に先立って卒したため、貞庵は図南の養子（嫡孫承祖）として十三歳で家を継ぎ、研鑽を積んで尾張医業の統括役を勤めた。藩医研修のため、また町人への啓蒙のため「医学館」を開設したのである。

一筋北側のJは鈴木仙蔵とあり、その父の仙蔵は眞實と号し、田中道磨門下で国学を修めた人物である。眞實は

微禄の国方手代から、清須代官、上有知代官に出世し、長岡炉裏番まで勤めた。寛政元年（一七八九）の本居宣長来名の折にその門に入り、横井千秋の『古事記伝』の出版に尽力したことで知られている。

医学館の北西側Kは丹羽嘉六とある。主に御記録所で書役を勤めた下級武士だが、世間では盤垣子の号で能書家として知られていた。七歳にして丹羽嘉言の門に入り、中国・元代の能書家子昂の行書を習得するなど早熟な才を見せる。尾張家十二代斉温、十三代斉荘に楷書を教え、御目見以上に出世している。

その西側Hは恩田新三郎で、その養父恩田進治仲任（維周）は高須藩七代勝當の近侍として教育係を務め、後に継述館総裁や明倫堂教授を歴任した漢学者であった。岡田新川は実兄にあり、兄弟で継述館総裁をつとめたことになる。

その北側Eには冢田多門（大峯）の名が見える。大峯は長野の人で十六歳で江戸に出て独学で儒学を修め、細井平洲の知遇を得て尾張家九代宗睦に召し出された。名古屋に移住したのは文政元年（一八一八）のことであり、この絵図の成立年代から遠くない。

明治三年頃の絵図では、その一部に深田惣一郎の名前がみえる。これは深田、塚田の読み間違いではなく、深田正韶（香實）の子孫である。香實は代々



尾張藩の儒官をつとめる家に生まれ、儒学のみならず、易教、神道を学び、書家、歌人としても一流の人物であった。特筆すべきは『尾張志』の編纂につながる「天保会」の発起人として文人化人サロンの核となったことである。この惣一郎は香實の長子精一せいいちの嫡子か嫡孫にあたるはずなのだが、残念ながら『藩士名寄』には彼らの履歴がなく判然としない。それにしても大筆の跡に香實が居たとは、「事実小説より奇なり」。

儒者恩田氏の西隣のGは須賀学之丞とあり、儒者で漢学者でもあった須賀精齋せいきの子孫に当たる人物である。曾祖父の順次郎（図書）安貞は、亮齋りやうさいと号する儒者で、祖父の重右衛門安重も衡齋こうさいと号し、尾張家九代宗睦の侍講をつとめた三代続く儒者の家であることが知れる。祖父衡齋は家督の後四年ほどの文化六年（一八〇九）に死亡し、その跡を継いだ父廣三郎の経歴は分からないものの、学之丞は文化十一年（一八一四）に家督を継いでいるので、短期間の代替わりによって「儒学者の家業」は廃絶したようである。冗談だ

が、尾張の学者の家はおよそ三代で「尾張」なのかもしれない。

桑名町通と蒲焼町筋の北西Cには柴田龍溪たけのけいの名が見える。七十俵取りの奥医師だが、一方で龍廻屋弘器たつのやひろきという号で狂歌詠者として知られていた。

Mには増田吉十郎がいた。奥向きの小姓や中奥御番、御小納戸、御納戸を歴任した人物だが、その子の源之丞も奥仕事を仰せつかり、殿様の側で小姓や使番を勤めた。この源之丞は朴山ぼくざんと号し、多技多能の特質は和歌、俳句、彫刻、絵画に才を発揮した。中でも平曲に長じ、郭公と名付けた琵琶を愛した人物であったことが伝わる。

Mの南Oには鈴木多門治と記されている。家禄百石の町奉行所吟味役を専らとした人物だが、春蔭しゅんいん、椰園やえんと号し、本居宣長門下の国学者で和歌を通して名が知られていた。同門の国学者として様々な古典の研究書を編んだ市岡猛彦たけひこの弟でもある。

さらにUは二百石取り馬廻組の渡

辺六一郎の役宅だが、明治三年頃の絵図にはその北半部が分割されて山田梁山りやうざんの名前がみえる。この梁山は医号を貞元ていげんと称す医者である。その祖父である梁山は本草学に精通して灸治で名高い町医者で、晩年近くに御目見医師となった異色の経歴をもつ。また父は寄合医師として活躍した貞石ていせきであり、少なくとも貞石の代にはこの役宅にいたことが知れる。

さて、宣長門下の国学者、鈴木胤あきらはご存じであろう。日本語に語尾活用があること（用言）を発見、体系化した人物である。その業績は地元ではあまり評価されていないが、詳しくは『市史人物編』、平易な解説なら、山本祐子『尾張資料のおもしろさ 原典を調べる』（名古屋博物館）を参考にしてほしい。本題に戻ると、胤の実兄は貞石であり、姉婿が柴田龍溪しばたりのけいという関係にあるのだ。

以上このブロックには一般的な武士ではない人物が多いことを紹介してきた。二十五区画のうち十区が、儒者や医者という「非戦闘員」的な専門職に割り当てられていたことは、その特異性を

物語っている。さらに、多くが下級身分であり、親兄弟に「同業者」が多い環境もわかる。ではこうした屋敷割は昔から意図されていたのだろうか？ 宝暦三年（一七三五）の『坪間路頭帳』と見比べると、この区域の家名のうち、文政の絵図では五家しか残っていない。つまり、今回取り上げた人物の大半は、新たにこの場に役宅を得たということ、さらに昔から医者や儒者が多かったわけではないことがわかる。とすれば、なぜこうした人物が集まったのだろう。

江戸時代後期にもなると、太平の時代の時間的余裕だけは豊かであった武士のなかに、家の学問、家の芸というものを含め、それぞれの分野での専門性を高め、それを生かして出世につなげる風潮が高まる。また、都市部では学問、教養、芸能、娯楽のサークルが作られ、武士や町人の身分制度を超越した文化人サロンの様相を呈するようになる。こうした寛容な時代背景と町人地に入り込んだ立地条件が、結果的に儒者や医者と呼ばれた要因だったように思える。時代の潮流と立地、これこそがキーワードだったのではなからうか。

（調査研究員 松村冬樹）

出雲国風土記

奈良時代初頭の和銅六年(七一三年)

全国に地誌編纂開始の命が下り、編纂を終えた国から順次、朝廷に提出された諸国の「風土記」。しかし、中世のうちにはそのほとんどが失われ、現在ではわずかに五カ国の風土記が部分的に欠損した状態で残存しているのみである。他の五十余国の風土記は、諸書に引用された極めて断片的な記事を除くと、跡形もない。

そうした中、出雲国風土記は幸運にもほとんど完本に近い内容で伝来し、風土記編纂の原初の姿を知る上で貴重な史料となっている。

さて、蓬左文庫所蔵の出雲国風土記(以下、蓬左本)は、徳川家康九男で初代尾張藩主であった義直直筆になる題字があり、残存する出雲国風土記の写本中、最も古い部類に属する。ちなみに最古の写本は、後に肥後藩主となる細川家の幽斎(藤孝)が、慶長二年(一五九七)に筆写させた本(永青文庫所蔵。以下、細川本)で、その奥書に幽斎が、徳川家康から親本(現存せず)を借りて写した、と記している。田中卓氏らの書誌学的研究によると、蓬

左本もまた、細川本と同じく家康の所蔵本の系統であるとされている。

ところで、蓬左本の表紙を開くと、戦前に島根県史編纂室より贈られた、「日本風土記六十六巻今繰存出雲国記一冊而已是神国之徴兆也 依為当国之靈物奉寄進日御碕社者也 寛永十一年秋七月日従二位行権大納言 源朝臣義直(花押)」とある文章の写真が、袋に入れられて貼付されている。これは島根県の著名神社である日御碕神社が所蔵する出雲国風土記(以下、日御碕本。島根県指定文化財)の奥書である。この年(一六三四年)、「日本全国で唯一、出雲国の風土記だけが失われずに残るとは、さすがは神国の出雲国である」として義直が筆写させ、自ら題字と奥書を記し、献納したのである。書誌学的研究からも日御碕本は、蓬左本をさらに写したものと考えられている。

実は同年、日御碕神社では、三代将軍家光の命で松江藩主京極忠高が社殿新築に着手している。義直の出雲国風土記献納も、これと一連の動きであろう。

神を敬い本を愛した、義直らしい逸話である。

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> / 〈蔵書検索もできます〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【J R】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日(祝日のときは直後の平日) 5月2日(月)、8月15日(月)は展示室のみ臨時開館します。

12月中旬～1月3日 ※催事により変更することがあります。

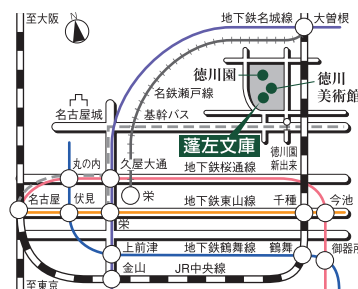
■展示室／有料 一般:1200円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。



「蓬左」第82号 ☆平成23年4月9日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫 ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:菱源(株)

※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。